

平成28年度第2回 新潟市美術館及び新潟市新津美術館協議会 議事録要旨

日 時：平成29年2月25日（土）午後2時から

会 場：新潟市美術館 講堂

出席者：

|         |          |                 |              |
|---------|----------|-----------------|--------------|
| (委員) 会長 | 中山 輝也    | 新潟県博物館協議会副会長    |              |
|         | 大倉 宏     | 美術評論家           |              |
| 副会長     | 金山 喜昭    | 法政大学キャリアデザイン学部長 |              |
|         | 佐藤 靖子    | 新潟市立中野小屋中学校長    |              |
|         | 菅井甚右エ門・哲 | 書人              |              |
|         | 建畠 哲     | 多摩美術大学学長        |              |
|         | 降旗 千賀子   | 目黒区美術館学芸係長      |              |
|         | 岩城 文夫    | 公募委員            |              |
|         | 渡辺 千代子   | 公募委員            |              |
| (事務局)   | 新潟市美術館   | 塩田 純一           | 新潟市美術館長      |
|         |          | 加藤 正人           | 同 副館長        |
|         |          | 高橋 良子           | 同 総務係長       |
|         |          | 荒井 直美           | 同 学芸係長 (学芸員) |
|         |          | 上池 仁子           | 同 副主査 (学芸員)  |
|         | 新潟市新津美術館 | 横山 秀樹           | 新潟市新津美術館長    |
|         |          | 高橋 努            | 同 副館長        |
|         |          | 大森 慎子           | 同 主幹 (学芸員)   |

次第：

- 1 部長挨拶 新潟市文化スポーツ部長 山口 誠二
- 2 開会挨拶 新潟市新津美術館長 横山 秀樹
- 3 出席者紹介
- 4 議事  
平成29年度 新潟市美術館及び新潟市新津美術館の事業計画について
- 5 閉会挨拶 新潟市美術館長 塩田 純一

(部長が公務で遅れるため、順序変更)

#### 1 開会挨拶 (横山館長)

両館とも、来館するお客様に喜んでいただきたいという思いで美術館を運営している。委員の皆様方から、率直な、かつ着眼的な視点からご意見をいただきたい。

#### 2 出席者紹介

事務局より、委員と事務局の出席者を紹介。

#### 3 議事

(中山会長)

平成 29 年度の両美術館の事業計画について委員の皆様の活発なご意見をお願いしたい。

事務局より、資料 1、資料 2 及びパワーポイントの画像に沿って、新潟市美術館の平成 29 年度の事業計画について説明。

(部長が到着)

#### 4 部長挨拶

(山口部長)

遅れて大変申し訳ありません。鶴保大臣が新潟の文化発信に興味があるということで、昨夜から視察に来られていた。特にマンガ・アニメに興味をお持ちで、マンガ・アニメ情報館を見ていただき、情報交換をさせていただいた。総務省からも、美術館も含め、新潟の文化発信・活躍は注目を浴びている。

本日は、来年度の事業についてご指摘をいただきたい。ぜひ忌憚のないご意見をお願いします。

(議事を再開)

資料 3、資料 4 及びパワーポイントの画像に沿って、新津美術館の平成 29 年度事業計画について説明。

(建畠委員)

新潟市美術館について、前川國男建築のツーリズムネットワークには、具体的にどのように参画するのか。

(塩田館長)

前川國男は新潟の生まれで、当館は晩年の作品で、前川自身も思いを持って設計したと考える。

2015年に開館30周年で改修する際、前川のコセプトを尊重し、構造的な部分には大きく手を入れなかった。また、前川建築を当館の財産として、前川建築についてのパンフレットを作成した。一方で、国立西洋美術館を含むル・コルビュジエの建築が世界遺産になったこともあり、前川の初期の作品が集中している弘前市が音頭を取って、代表的な前川建築の存在する新潟、熊本、埼玉、神奈川などの自治体（都道府県や政令市）でネットワークを組んだ。ル・コルビュジエの弟子であり、日本に近代建築の種をまいて育てた前川に光を当て、ネットワークを組んで、観光も含めて働きかけていこうというプロジェクトである。

(建島委員)

今日の日経新聞に前川國男の建築ツアーをやるという大きな記事が出た。また、国立西洋美術館が世界文化遺産に指定されたが、コルビュジエは図面は描いたが1回も来ていない。実質的には前川國男が現場監督から何から全部やっている。

(塩田館長)

市民の皆さんに、ここが前川國男の設計であることを知っていただきたく、改修時に受付の脇に前川國男の顕彰コーナーを作り、注目されるようになってきている。

(降旗委員)

私どもの目黒区役所が村野藤吾の建築で、村野藤吾展を何回か美術館でやっている。そのとき村野藤吾の建築ネットワークを作り、毎年4月か5月に目黒区庁舎のツアーを13年やっているが、毎回300人くらい来る。同じ時期に、ほかの村野建築でもツアーをやり、すごく良い雰囲気だった。建築にはとても人が来るので、美術館にとっては良い力になると思う。

平成29年度の事業計画について、新潟市美術館もリニューアルされて非常に良い形で、新津美術館も特徴を活かしながらやっている。新潟市美術館はバランスにすごく配慮されている。今回も世田谷美術館の魯山人のコレクション、石川直樹さんも非常にユニークで期待できる。巡回展をただ受け入れるだけでなく、こちらと石川さんの関係というところに行くのは非常にいいことだと思う。現代美術について、新潟市民の反応は何か変わってきているか。

(塩田館長)

昨年の「アナタにツナガル」展では、岩井成昭さんが人口減少、高齢化少子化による空き家問題について新潟でリサーチをして作品を発表した。また、折元立身さんが新潟の視覚障

がい者とともに「パン人間」というパフォーマンスを行った。地域の問題にアーティストがどう関わっていくかというテーマで展覧会を企画したが、入場者数は決して多くなかった。しかし、この展覧会をきっかけに始めたフェイスブックで、若い世代の方が展覧会を話題にして、新潟にとどまらずほかの地域や首都圏からも来てもらうことが随分出てきた。少しずつ積み重ねていきたい。

(渡辺委員)

新潟市美術館と新津美術館の特色について、どういう違いがあるか。

(中山会長)

先に来年度の事業については、いかがですか。

(渡辺委員)

阿部展也について教えてもらいたい。

(塩田館長)

阿部展也は新潟県出身の作家で、戦前、戦中期からシュルレアリスムという美術の運動をいち早くとらえて、瀧口修造という詩人と一緒にコラボレーションをするなど、非常に前衛的な仕事をした。戦後も具象的なシュルレアリスムの時期を経て、抽象絵画の方向に進んでいく。その後、1960年代にイタリアに渡って非常に国際的な活躍もした、新潟の近現代美術を考える上で最も影響力のあった非常に重要な画家である。当館でも十数年前に大きな回顧展をやったが、その後阿部展也に関するさまざまな資料が収蔵されたので、それを研究し新たな成果を問う形で展覧会を当館で企画し、美術館連絡協議会を通して全国巡回させようと動いている。そのための作品研究をやっていく。

(岩城委員)

来年度のラインナップは本当に充実していて、一般の方が興味を持つ展覧会がたくさんある。ただ、一般受けするものと、「アタナにツナガル」展のような美術館がやりたいものが組み合わされて出てくると思ったが、来年度は入場圧力が強いのか、それはいいのだと思うが、無難な、集客が見込めそうな展覧会が多いという印象だ。

(佐藤委員)

石川直樹さんの展覧会について。2015年の水と土の芸術祭のとき、潟と里山で、学校の中に入って直接ご指導いただいた。トークショーがあるということだが、そのときの生徒を招待してはどうか。石川直樹さんからコメントや示唆をいただくと楽しいのではないかと思う。教育では、本物に触れる機会が乏しい現状なので、できるだけそういう機会を設けて

いただけたらと思う。

新津美術館で松本零士さんのトークショーにも学生枠があるとよい。アニメーションが大好きな子どもたちはいっぱいいるし、新潟はアニメ王国ではないかと思う。教育にも配慮していただきたい。

(金山委員)

新津美術館の松本零士さんの展覧会の説明で銀河鉄道の話があった。私は新津鉄道資料館の協議会の委員もやっているが、SLの実物があるので、鉄道資料館に誘導する工夫をしていただきたい。ポスターやチラシを置くだけでなく、誘導するような協働事業もやると、相乗効果が出る。検討してほしい。

(横山館長)

先日、新津鉄道資料館と連携事業について打ち合わせを行った。鉄道資料館からも意見をもらい、何ができるか検討している段階である。何らかの形ではやりたい。

(大倉委員)

来年度の企画は集客に配慮された構成だと思う。

新潟市美術館は、現代の作家たちを紹介する意欲的な展覧会をされてきた。来年度は石川直樹展はあるが既にある程度評価の定まった方なので、評価の定まった方とは違う独自の視点で、今の新潟ゆかりだけではなく、現代や、ときには足元のいろいろな動きを紹介する企画展を何本も見ても非常に刺激されてきた側としては、その点残念に思った。来年、再来年度以降、そういう企画を期待する。

今、開催中の常設展が私は非常に良いと思う。企画展である程度集客を見込む一方、常設展で非常に工夫をされた展示があると、美術館の魅力が増す。評価が定まった作家と、新潟の全く知られていない作家を同じ展示室の中で向き合わせることで、無名の作家の作品の隠れていた魅力が、新しく、いろいろと見えてくるという、創造的な展示だ。今回のように、見慣れた所蔵品を新しい角度で見せてくれる常設展をさらに企画してもらえると、新潟で美術館にしばしば来る者としてはとても刺激になる。

もう一つ。村野藤吾や前川國男などの建築家を探訪する試みと連携するというのはとてもいいと思う。私は新潟まち遺産の会という建築関係の会にも関わっており、西大畑のモダニズム建築を見るツアーをやった。あまり有名な作家のものではなく、NSG美術館とかスターマンションとかマニアックな人が好きなものがこの辺りにいくつかあるが、そのツアーで、建築としてこの美術館を見たことがなかったという人がいた。裏の庭まで来たことがなかつ

たという人が多かった。この美術館は建築的にも非常に魅力のある美術館なので、前川國男だけではなくて新潟市のモダニズム建築という視点で連携したツアーも、私どもも企画協力させていただくことができるし、実施されるといいと思った。

新潟市では、朱鷺メッセが槇文彦さん、りゅーとぴあは長谷川逸子さん、音楽文化会館や歯科大学、ほんぽーとは岡田新一さんの設計で、ほかにも有名な建築家の方の作品、近現代建築がある。新潟市の体育館はドコモモ・ジャパンモダニズム建築 100 選に選定されていて、構造的にも大変ユニークな作品である。そのほか萬代橋や万代島水揚げ場など、産業遺産でもいろいろある。そのような新潟市の近代建築、産業遺産の中のひとつとして、この美術館見学をそういうツアーの中に組み込むのもいいのではないかと思う。

来年の新津美術館の「パリに生きる新潟の作家たち」展だが、私が関係している新潟絵屋という画廊でも、ちょうど同じ時期に原田さんと清水さんの新作展などを開催し、民間の画廊と美術館でパリで活躍する新潟の方々を紹介し、盛り立てたいと思っている。

(菅井委員)

予算について。今日は山口部長がいらっしゃるので。

何をするにしてもお金がかかる。いいものをやれば当然お金がかかる。ただ、公の美術館として、二人の館長をはじめ学芸員の皆さんとよく相談して計画を立てているから大した問題はないが、やはりどこでどういう話し合いの中で予算がきまるのか。こういう時代だからもう少し潤沢にとは言わないが。来館される方は、それなりの企画があるから来るわけですから。どこでどんな形で予算が最終的に決まるのか。何とか絞り出すのに、お二人の館長はじめ皆さま非常に大変だと思う。下手な計画や運営だと、何をやっているのだと言われる。では、お金があればいいのかということとそうでもないが、やはり先立つものがないと動きが取れない部分もある。何とかご努力いただきたい。

もう一つは、学芸員の勉強をする時間について。館長をはじめ学芸員は、やはり見たり聞いたりしてもらわないとだめだと思う。何とか踏ん張っていただきたい。お金がないのは切ない。こういう時代だから大変だとは思いますが。

(山口部長)

両館長も学芸員も、予算が潤沢にあればそれだけのことはできると思うが、財源が限られている。

もう一つは、例えば新潟日報や新潟総合テレビなどと共催し、それぞれ協力し、費用負担して、より本物のものをお見せしたいという努力をしている。

学芸員の研修については、それなりに他館に研修に行っている。

また、新潟市単独の主催事業は、冬であり人が入らない時期に、自主企画展をするという努力もしている。

先ほどの両館の特徴は何かという質問について。それぞれの目指す姿、運営方針というのは抽象的で、「開かれた」とか「地域に密着した」とか「本物」といった部分で共通するところは多いが、基本的な考え方として、新潟市美術館は政令市新潟の顔になるような美術館。建物もル・コルビュジエの弟子の前川國男ということで注目を浴びている。また、障がい者の美術という新しいところに光を当てる行政の取り組みを、より強調していく。新津美術館は、地域と連携したり、毎年各区に隠れたものを探し出すなど、より市民、地域に寄り添った企画。また、子ども連れが車で来て一日楽しむ企画は、新津のほうがやりやすいと思う。

(塩田館長)

来年度のラインナップを考えると、自主企画の実験的な展覧会がやりにくい予算状況だった。世田谷美術館の北大路魯山人のコレクション展は、一か所から借りるため輸送費も少なく、借用料もなしで、コストを抑えられる。予算は800万円だが、新潟市とBSN新潟放送とで折半で400万円ずつ出資し、1万人ちょっと入れれば何とか回収できると考え選んだ。お金はかけずそれなりの集客が見込めるものを、優先的に入れていく。それでもやはり石川直樹展など、実行委員会の相手方が見つからないものもあり、何とか努力して、少しでも赤字を少なくしたい。実験的な展覧会をやるのが難しい状況である。

(建畠委員)

この会議は初めてだが、二つの美術館が一つの会議で同時に審議されるというのは非常に珍しい。多分、ここが唯一かもしれない。いくつかの美術館を持っているところがあるが、それぞれ別々に開かれている。二つ一緒だとどうしても比較したくなったり、違いがどこにあるのかということ誘発してしまうが、市が合併した結果、それぞれ独立館としてあったものが一緒に入った。出来た段階で分けができていればよいが、こちらの場合は、両方もそれぞれ旧市における総合的なサービスを期待されていたので違いは特に意識する必要はなかったが、一緒になるとやはり特色がどうなのかということになる。

今、話を聞いていると、新津美術館のほうは新潟市の出身作家とか新潟県の実業家に重心を置いていて、新潟市美術館のほうは必ずしもそこにこだわらないものも取組んでいくと見える。この差別化が本当に必要なのか。同じ区内にあるわけではない。それぞれに総合的なサービスを期待されているかもしれない。他方では違いを鮮明にしたほうがよいという気もする。どう考えているか。

(横山館長)

この美術館協議会が立ち上がった時に、金山委員や大倉委員が中心になり、今後の両館の運営方針についてかなりの時間を割いて検討された。そのときに、新潟市美術館と新津美術館の運営方針が決められ、それに基づき運営している。

渡辺委員への回答になるが、新潟市美術館は政令市にふさわしい、市民に開かれた個性あふれる美術館、新津美術館は市民と連携しながら愛され親しまれる美術館という大きな理念に基づき、両館とも運営していくことになった。

一つのテーブルで両館が出てくるのは確かに珍しい。本来は二つに分かれたほうがいいと思うが、これはこれで、比較とか両館が担う役割が逆に明確になってくるのではないかと思う。

(建島委員)

今おっしゃった二つの館の性格は、普通の美術館なら両方必ず必要なことですね。

(横山館長)

そう思うが、重点の置き方だと思う。展覧会の企画の内容もそのような内容になっている。

(建島委員)

ゆるやかなくらいにしておいたほうが。こちらは市民サービスは要りませんということになると困るので。それとなく重点の置き方、比重が違うという理解でよろしいのですね。

(中山会長)

二つの美術館の存在は政令市を目指し合併したことによる結果であるが、これは太陽と月に例えられる。月が新津美術館で太陽が新潟市美術館、相互補完の原則で、ここ新潟でできないが新津でできるものもある。これが大切だと思う。そういう意味で、どちらもなければだめである。それで、現在は、うまくいっていると思う。

新津美術館の企画展について、政令市移行 10 周年はおめでたい話だが、「新潟市の隠れた名品展」という名前はどうかと思う。新潟市が誇れる名品展なら分かるが。ここは出来れば変えていただきたい。

そのあとの「パリに生きる新潟の作家たち」は相当苦勞するのではないかと思う。リーダー二人にほかの人たちがついていくわけだから、参加予定の作家がやめたと言われたら終わりだ。今からきちんとしておかないと、館長も学芸員も大変になる。よろしく願いしたい。

全体については、特に今年は一層市民に身近な企画になり、市立としてすばらしい役割を果たしていると思う。しかし、そうだからといって市民迎合ではなく、学芸員の能力維持、向上は常に第 1 級のレベルに向かっていっていただきたい。

(金山委員)

私がこの美術館に関わるようになったのは、ある事件の事後処理をするために、私が委員長になり、大倉委員にも協力していただき、この美術館の立て直しをするための委員会が設置されたことによる。委員会では美術館の改革や改善作業をした。その後、塩田館長が着任され今日までこの美術館を円滑に運営されてきた。改革の前よりも美術館の質が上がったと思う。今日も、来て気づいたのですが、若い人たちが随分来ている。集客も安定している。

新津美術館については、新潟市と合併した後も、両館はそれぞれ個別に活動していて、お互いが意思疎通するような状態ではなかった。美術館を見直していく過程で、見直し後に新津美術館とどう棲み分けを図っていくか、あるいはどの部分を共通のベースとして美術館としての役割を担っていくかについても協議して、見直し作業をした。今日の資料の中で示されていないが、それぞれの美術館のミッションは委員会の中で議論して作成した。コレクションについても、それぞれポリシーを定めて収集する。それを踏まえて、この協議会は共同でやりつつ意思疎通をはかりながら、役割分担してやっていく形で今日まで来ている。事情を知らない方は、今日のように事業の案だけを示されると、どういう違いがあるのか疑問に思うのは当然のことなので、事業は事業案として、その前提になる両美術館のそれぞれのミッションや基本方針の資料についても、資料として提示したほうが丁寧である。

(降旗委員)

普及活動について、どちらの館も、同じ学芸員が展覧会と普及とどちらもやっている。

最近、教育普及が非常に重要だということが根づいてきて、どこも教育担当の学芸員を入れるようになってきた。教育普及がブームになってから、担当者を一人置くケースが多いが、今までみんなでやっていたことが担当者に集中され、担当者が孤立していく状況が、今、けっこうある。全国美術館会議の教育普及ワーキンググループの話聞いたところ、どうもそういう状況がある。教育普及が非常に重要だといってそうなったのだが、その弊害というか、逆に違うことが今起こってしまっている。それを考えると、館全体で取組むというのは、この2館ぐらいの規模の館では重要と感じる。みんながやっているということがお客にも伝わるので、新潟市美術館もリニューアル後に1階にだれでも参加できるコーナーを作って、いろいろな学芸員が一緒になってやっているということが見えてくるので、とてもいいことだと思う。

(塩田館長)

新潟市美術館には常勤の学芸員が6名、非常勤が1名、計7名で、企画展を年間4本から5本、それからコレクション展も約1,000平方メートル弱ぐらいの展示室で年間4本、来年度は予算の関係から3本に減らしたが、それぞれ企画性を持ったコレクション展を企画して

いる。それ以外にも教育普及、作品の収集管理ほか、本当にいろいろな仕事がある。

教育普及に関しては常勤3名プラス非常勤1名でやっているが、同時にこの学芸員も企画展やコレクション展も担当している。そういう意味ではけっこう過重な労働条件であると言える。それでも、学芸員たちは意義を感じてやってくれていると私は思っている。

(横山館長)

新津美術館は常勤の学芸員は3名である。ただ、1名が病氣療養中で、実質的には2名で、嘱託が1名の計3名でやっている。企画展は5本、教育普及もやっている。学芸員が多く必要ということも分かるが、では、実質的にどれだけやるかという部分にもかかわってくるといえる。うちの学芸員は展示事業も普及事業も、いる人間が両方を兼ねてやっているが、一生懸命頑張っているし、私の目から見ても着実に力をつけている。

(大倉委員)

今日は山口部長もいらっしゃるので申し上げたい。菅井委員から予算の話もあり、今、塩田館長から、やはりペイする展覧会をやらなければいけない時代状況だという話があった。新潟市美術館も開館30周年を迎え、新津美術館のほうも20周年ということで、それだけの歴史ある美術館での独自の企画は多くの集客はないかもしれないが、美術関係者が美術館を注目する、そのような展覧会が1年に一つもないという状況は、やはり新潟市として恥ずかしいと思う。その辺は部長から、美術の世界から見た美術館の独自性というものの重要性に呼応した予算措置も、今後ぜひ検討していただきたいという意見が協議会で出たことを、ぜひ篠田市長に伝えていただきたい。

(山口部長)

おっしゃることは重々承知し、市長にも伝えたい。

予算取りのやり方もいろいろある。例えば何十周年という冠をつけることによってやりやすくなるということもある。また、予算によらない内容の工夫、特に塩田館長や横山館長のネットワークによりなしえるものもある。また、「アナタにツナガル」展を塩田館長の尽力でやってもらったが、障がい者に光を当てるような形で、来年度、別途、文化政策課で予算取りをして、いろいろと策略を練って進めていきたい。

(金山委員)

学芸員の人数の話が出たが、もともとはもっと少なかった。それが見直し後に学芸員の数も増やさなければならぬと我々が市長に提言し、市長がそれを受け入れて、優秀な学芸員を新たに何人か追加して今日6人になっている。市がそれなりの判断をしてきちんと学芸員を手当てしたことは評価したいと思う。

一方で、予算はシーリングがかかっている。久しぶりに出席できて予算を見たが、以前と比べると減ったと思う。学芸職はきちんと増やしていながら予算を減らしていたら、その学芸員が働けない。学芸業務に十分に実力を発揮するためには、予算の裏づけが必要になる。この状態だと宝の持ち腐れになってしまう。単に巡回展のような企画展を回してくるだけなら、極端なことを言う学芸員でなくてもできる。しかし、学芸員が6人も配置されているのだから、その人たちが十分に働けるような裏づけとなるような予算を確保していただきたい。

新潟市における美術館の恒常的な外部発信や文化事業を考え、安定的な予算について市長と協議していただきたい。

(中山会長)

渡辺委員、補足はないですか。

(渡辺委員)

皆さんご苦労されている企画で、行ってみたいところをチェックしてみたが、松本零士さんとかメルヘンとかいろいろある中で、これはやはり大人だけの企画ではなくて、親子とか恋人とつながっていけばいいのではないかと思う。ただ、集客ということになると、人数でいろいろと出さなければならないというのは分かるが、損して得取るみたいな。1日だけ親子を無料にするとか、親子でなくてもいろいろあると思うが、その辺りからまず。サラリーマン家庭、子育て世代やほかの方も、生活費にお金が行って、文化的なほうになかなか回っていかない。1日だけでも入場無料と銘打って、ほかのところで集客をつなげていくようなことが望まれる。

2館とも行けるだけ行ってみた。友だちや知人に招待券を配ったり一緒に行ったりして意見を聞いてみたが、無料ならいいよねという意見が一般論ではないかと思う。いい企画は、本当に見て、みんないいと思う。いいという感じに行くまでの集客を知名度のある人の企画で出して、無料デーのときに握手してもらったとかは子どもにとってもいい機会だと思うので、そういうことをまず企画して、集客は集客でまたつながっていけばいいのではないかと思う。

(中山会長)

これは記録して、実行できたらやってください。

(佐藤委員)

両館は私の中では住み分けができています。新津美術館ができたころはとてもマニアックでいいと思った。原美術館と新津美術館でしかやっていないような企画展もあったと思う。本

当に前衛芸術が好きな人は新津美術館に来ているなど。隣に県立植物園や、大きな広場があって、子ども連れは非常に新津美術館に行きやすい。

先ほど金山委員からも話があったが、何かコラボするとか、新津駅から行くときに楽しめるような企画とか。話が少し美術館から離れるが、AKBの総選挙に行った。新潟交通とコラボして何々行きというバスをやったり、町が一体化して打ち上げて行く、ああいうパワーがもっと続くといいと思う。美術も起爆剤として、新潟駅から何か発信していくとか、美術館に至るまで楽しめるようなアートとかときどき発信して、表参道・新潟館ネスパスも利用しながら、もっと美術館が頑張っているところが見せられるといい。

(岩城委員)

両館で人事交流はあるのか。収集とか寄附が増えているが、収蔵スペースは両館とも十分足りているか。

(塩田館長)

人事交流は相互にあるが、ここ数年はない。それぞれの美術館で学芸員のキャリアを積んで、タイミングが来れば人事交流もありうる。

新潟市美術館では収蔵庫が二つあるが、毎年作品を収集しているので、だんだん余裕が少なくなっている。当面はスペースをやりくりして何とか納めていく。

(横山館長)

新津美術館は少しだけ余裕はある。

(建島委員)

収蔵作品はそれぞれの美術館ごとにやっている。購入予算はついているのか。

(横山館長)

若干ついている。

(建島委員)

寄贈の申し込みは、それぞれの美術館あてに来るのか。それとも市に対して来るのか。

(横山館長)

それぞれの美術館に来て、各美術館で判断している。

(建島委員)

そこで性格分けをして、これはこっちという必要はないのか。

(横山館長)

新潟市美術館も新津美術館も新潟市なので、市の収蔵作品となる。

(建島委員)

市有財産になると思うが、収蔵作品は管理上はどちらかの美術館で管理されるのか。

(横山館長)

管理上は独自です。

(中山会長)

寄贈作家の意思による。例えば、新潟市美術館はいやだが新津美術館ならいいとか。

(山口部長)

企画展をした縁で、というのもある。

先ほどの学芸員の話だが、雇用予定もあるので、そういうタイミングで人事交流も必要かなと思う。

(中山副会長)

ご意見をいただきありがとうございました。このご意見については事務局でさらに検討していただきたい。以上をもちまして、本日の議事を終了します。

## 5 閉会挨拶

(塩田館長)

熱心なご議論をいただきありがとうございました。美術館はいつもいろいろな制約の中でいかにベストを尽くすか、苦勞をしながら運営している。金山委員からご指摘があった、来年度の展覧会企画事業計画だけでなく、その大本になる両館の運営方針を、今後必ずお出しする。本日はありがとうございました。